

ゼカリヤ書

第一章一ダリヨスの二年八月のエホバの言イドの子ベレキヤの子なる預言者ゼカリヤに臨めり云くニエホバいたく汝らの父等を怒りたまへり三萬軍のエホバかく言ふと汝かれらに告よ萬軍のエホバ言ふ汝ら我に歸れ萬軍のエホバいふ我も汝らに歸らん四 汝らの父等のことくならざれ前の預言者等かれらに向ひて呼はりて言り萬軍のエホバかく言たまふ請ふ汝らその惡き道を離れその惡き行を棄てて歸れと然るに彼等は聽ず耳を我に傾けざりきエホバこれを言ふ五 汝らの父等は何處にありや預言者たち永遠に生んや六 然ながら我僕なる預言者等に我が命したる吾言とわが法度とは汝らの父等に追及たるに非ずや然ゆゑに彼らかへりて言り萬軍のエホバ我らの道に循ひ我らの行に循ひて我らに爲んと思ひたまひし事を我らに爲たまへりと七ダリヨスの二年十一月すなはちセバテといふ月の二十四日にエホバの言イドの子ベレキヤの子なる預言者ゼカリヤに臨めり云く八 我夜觀しに一箇の人赤馬に乗て谷の裏なる鳥拈樹の中に立ちその後赤馬駁馬白馬をる九 我わが主よ是等は何ぞやと問けるに我と語ふ天の使われにむかひて是等の何なるをわれ汝に示さんと語り一〇 鳥拈樹の中に立る人答へて言けるは是等は地上を遍く歩かしめんとてエホバの遣したまひし者なりと二 彼ら答へて鳥拈樹の中に立るエホバの使に言けるは我ら地上を

行めぐり觀しに全地は穩にして安しニエホバの使こたへて言ふ萬軍のエホバよ汝いつまでエルサレムとユダの邑々を恤みたまはざるか汝はこれを怒りたまひてすでに七十年になりぬと三エホバ我と語ふ天の使に嘉事慰事をもて答へたまへり四 かくて我と語ふ天の使に言けるは汝呼はりて言へ萬軍のエホバかく言たまふ我エルサレムのためシオンのために甚だしく心を熱して嫉妬おもひ五 安居せる國々の民を太く怒る其は我すこしく怒りしに彼ら力を出して之に害を加へたればなり六 エホバかく言ふ是故に我憐憫をもてエルサレムに歸る萬軍のエホバのたまふ我室の中に建られ量繩エルサレムに張られん七 汝また呼はりて言へ萬軍のエホバかく言ふ我邑々には再び嘉物あふれんエホバふたたびシオンを慰め再びエルサレムを簡びたまふべしと八 かくて我目を擧て觀しに四の角ありければ九 我に語ふ天の使に是等は何なるやと問しに彼われに答へけるは是等はユダ、イスラエルおよびエルサレムを散したる角なりと一〇 時にエホバ四箇の鍛冶を我に見し給へり二 我是等は何を爲んとて來れるやと問しに斯こたへ給へり是等の角はユダを散して人にその頭を擧しめざりし者なるが今この四箇の者來りて之を威しかのユダの地にむかひて角を擧て之を散せし諸國の角を擲たんとす

第二章一 茲に我目を擧て觀しに一箇の人量繩を手に執居れば二 汝は何處へ往くやと問しにエルサレムを量りてその廣と長

の幾何なるを觀んとすと我に答ふ三時に我に語ふ天の使出行たりしが又一箇の天の使出て之に會ひ四之に言けるは走めてきてこの少き人に告て言へエルサレムはその中に人と畜と饒なるによりて野原のごとくに廣く居るべし五エホバ言たまふ我その四周にて火の垣となりその中に榮光とならん六エホバいひたまふ來れ來れ北の地より逃きたれ我なんぢらを四方の天風のごとくに行わたらしむればなりエホバこれを言ふ七來ればピロンの女子とも居るシオンよ遁れ來れ八萬軍のエホバかく言たまふエホバ汝等を虜へゆきし國々へ榮光のために我儕を遣したまふ汝ら打つ者は彼の目の珠を打なればなり九即ち我手をかれらの上に搖ん彼らは己に事へし者の俘虜となるべし汝らは萬軍のエホバの我を遣したまへるなるを知ん一〇エホバ言たまふシオンの女子よ喜び樂め我きたりて汝の中に住ばなり二その日には許多の民エホバに附て我民とならん我なんぢの中に住べし汝は萬軍のエホバの我を遣したまへるなるを知ん三エホバ聖地の中にてユダを取て己の分となし再びエルサレムを簡びたまふべし三エホバ起てその聖住所よりいでたまへば凡そ血肉ある者エホバの前に肅然たれ

ならずやと三ヨシユア汚なき衣服を衣て使の前に立をりしが四エホバ己の前に立てる者等に告て汚なき衣服を之に脱せよと宣ひまたヨシユアに向ひて觀よ我なんぢの罪を汝の身より取りけり汝に美服を衣すべしと宣へり五我また潔き冠冕をその首に冠らせよと語り是において潔き冠冕をその首に冠らせ衣服をこれに衣すエホバの使は立をる六エホバの使證してヨシユアに言ふ七萬軍のエホバかく言たまふ汝もし我道を歩みわが職守を守らば我家を司どり我庭を守ることを得ん我また此に立る者等の中に往來する路を汝に與ふべし八祭司の長ヨシユアよ請ふ汝と汝の前に坐する汝の同僚とともに聽べし彼らは即ち前表となるべき人なり我かならず我僕たる杖を來らすべし九ヨシユアの前に我が立つところの石を視よ此一箇の石の上に七箇の目あり我自らその彫刻をなす萬軍のエホバこれを言ふなり我この地の罪を一日の内に除くべし一〇萬軍のエホバ言たまふ其日には汝等おのおの互に相招きて葡萄の樹の下無花果の樹の下にあらん

第四章一我に語へる天の使また來りて我を呼醒せり我は睡れる人の呼醒されしごとくなりき二彼我にむかひて汝何を見るやと言ければ我いへり我觀に惣金の燈臺一箇ありてその頂に油を容る器ありまた燈臺の上に七箇の燭臺ありその燭臺は燈臺の頂にありて之に各七本づつの管あり三また燈臺の側に橄欖の樹二本ありて一は油を容る器の右にあり一はその左にあり四我答

へて我と語ふ天の使の問言けるは我主よ是等は何ぞやと五我と語ふ天の使に答へて汝是等の何なるを知らるかと言しにより我主よ知すとわれ言り六彼また答へて我に言けるはゼルバベルにエホバの告たまふ言は是のごとし萬軍のエホバ宣ふ是は權勢に由らず能力に由らず我靈に由るなり七ゼルバベルの前にあたるる大山よ汝は何者ぞ汝は平地とならん彼は恩恵あれ之恩恵あれと呼はる聲をたてて頭石を曳いださん八エホバの言われに臨めり云く九ゼルバベルの手この室の石礎を置たり彼の手にこれを成終ん汝しらん萬軍のエホバ我を汝等に遣したまひしと一〇誰か小き事の目を藐視むる者ぞ夫の七の者は遍く全地に往來するエホバの目なり準繩のゼルバベルの手にあるを見て喜ばん二我また彼に問て燈臺の右左にある此二本の橄欖の樹は何なるやと言ひ三重ねてまた彼に問て此二本の金の管によりて金の油をその中より斟ぎ出す二枝の橄欖は何ぞやと言しに三彼われに答へて汝是等の何なるを知らるかと言ければ我主よ知すと言けるに四彼言らく是等は油の二箇の子にして全地の主の前に立つ者なり

第五章一我また目を擧て觀しに巻物の飛あり二彼われに汝何を見るやと言ければ我言ふ我巻物の飛ぶを見る其長は二十キユピトその寬は十キユピト三彼またわれに言けるは是は全地の表面を往めぐる呪詛の言なり凡て竊む者は巻物のこの面に照して除かれ凡て誓ふ者は巻物の彼の面に照して除かるべし四萬軍

のエホバのたまふ我これを出せり是は竊盜者の家に入りまた我名を指て偽り誓ふ者の家に入てその家の中に宿りその木と石とを並せて盡く之を焼べしと五我に語へる天の使進み來りて我に言けるは請ふ目を擧てこの出きたれる物の何なるを見よ六これは何なるやと我言ければ彼言ふ此出來れる者はエパ舩なり又言ふ全地において彼等の形狀は是のごとし七かくて鉛の圓蓋を取あぐれば一人の婦人エパ舩の中に坐し居る八彼是は罪惡なりと言てその婦人をエパ舩の中に投げられ鉛の錘をその舩の口に投げがぶらせたり九我また目を擧て觀しに婦人二人出きたれりに鶴の翼のごとき翼ありてその翼風を含む彼等そのエパ舩を天地の間に持擧ぐ一〇我すなはち我に語ふ天の使にむかひて彼等エパ舩を何處へ携へゆくなるやと言けるに二彼我に言ふシナルの地にて之がために家を建んとてなり是は彼處に置られてその臺の上に立ん

第六章一我また目を擧て觀しに四輛の車二の山の間より出きたれりその山は銅の山なり三第一の車には赤馬を着け第二の車には黒馬を着け三第三の車には白馬を着け第四の車には白點なる強馬を着く四我すなはち我に語ふ天の使に問て我主よ是等は何なるやと言けるに五天の使こたへて我に言ふ是は四の天風に於て全地の主の前より罷り出たる者なり六黒馬は北の地をさして進み行き白馬その後に従ふ又白點馬は南の地をさして進みゆき七強馬は進み出て地を徧く行めぐらんとす彼汝ら往き地を徧

くめぐれと言たまひければ則ち地を行めぐれりハ彼われを呼て我に告て言ふこの北の地に往る者等は北の地にて我靈を安んずルエホバの言われに臨めり曰く一汝かの囚虜人の中の者ヘルダイ、トビヤおよびエダヤより取ことをせよ即ちその日に汝がれらがバビロンより歸りて宿りるをゼパニヤの子ヨシヤの家に到りニ金銀を取て冠冕を造りヨザダクの子なる祭司の長ヨシユアの首にこれを冠らせニ彼に語りて言べし萬軍のエホバ斯言たまふ視よ人ありその名を枝といふ彼おのれの處より生いてエホバの宮を建ん三即ち彼者エホバの宮を建て尊榮を帯びその位に坐して政事を施しその位にありて祭司とならん此二の者の間に平和の計議あるべし四猶またその冠冕はヘレム、トビヤ、ユダヤおよびゼパニヤの子ヘンの記念のために之をエホバの殿に納むべし五遠き處の者等來りてエホバの殿を建ん而して汝らは萬軍のエホバの我を遣したまひしなるを知にいたらん汝らもし汝らの神エホバの聲に聽したがはは是のごとくなるべし

第七章一ダリヨス王の四年の九月すなはちキスリウといふ月の四日にエホバの言ゼカリヤに臨めりニベテルかの時シヤレゼル、レゲンメレクおよびその從者を遣してエホバを和めさせ三かつ萬軍のエホバの室にをる祭司に問しめ且預言者に問しめて言けらく我今まで年久しく爲きたりしごとく尚五月をもて哭きかつ齋戒すべきやと四ここににおいて萬軍のエホバの言我に臨

めり云く五國の諸民および祭司に告て言へ汝らは七十年のあひだ五月と七月とに斷食しかつ哀哭せしがその斷食せし時果して我にむかひて斷食せしや六汝ら食ひかつ飲は全く己のために食ひ己のために飲ならずや七在昔エルサレムおよび周圍の邑々人の住ふありて平安なりし時南の地および平野にも人の住むをりし時に已往の預言者によりてエホバの言ひたりし言を汝ら知ざるや八エホバの言ゼカリヤに臨めり云く九萬軍のエホバかく宣へり云く正義き審判を行ひ互に相愛しみ相憐め一〇寡婦孤兒旅客および貧者を虐ぐるなかれ人を害せんと心に圖る勿れと一然るに彼等は背て耳を傾けず背を向け耳を鈍くして聽す二且その心を金剛石のごとくし萬軍のエホバがその御靈をもて已往の預言者に由て傳へたまひし律法と言詞に聽したがはざりき是をもて大なる怒萬軍のエホバより出で臨めりニ彼かく呼はりたれども彼等聽ざりき其ごとく彼ら呼はるとも我聽じ萬軍のエホバこれを言ふ二四我かれらをその識ざる諸の國に吹散すべし其後にてこの地は荒て往來する者なきに至らん彼等かく美しき國を荒地となす

第八章一萬軍のエホバの言われに臨めり曰くニ萬軍のエホバかく言たまふ我シオンのために甚だしく心を熱して妬く思ひ大なる忿怒を起して之がために妬く思ふ三エホバかく言たまふ今我シオンに歸れり我エルサレムの中に住んエルサレムは誠實ある邑と稱へられ萬軍のエホバの山は聖山と稱へらるべし四萬軍の

エホバかく言たまふエルサレムの街衢には再び老たる男老たる女坐せん皆年高くして各々杖を手に持べし五またその邑の街衢には男の兒女の兒満て街衢に遊び戯れん六萬軍のエホバかく言たまふこの事その日には此民の遺餘者の目に奇といふとも我目に何の奇きこと有んや萬軍のエホバこれを言ふ七萬軍のエホバかく言たまふ視よ我が民を日の出る國より日の入る國より救ひ出しハかれらを携へ來りてエルサレムの中に住しめん彼らは我民となり我は彼らの神となりて共に誠實と正義に居ん九萬軍のエホバかく言たまふ汝ら萬軍のエホバの室なる殿を建んとて其基礎を置たる日に起りし預言者等の口の言詞を今日聞く者よ汝らの腕を強くせよ○此日の先には人も工の價を得ず獸畜も工の價を得ず出者も入者も仇の故をもて安然ならざりき即ち我人々をして互に相攻しめたり二然れども今は我此民の遺餘者に對すること曩の日の如くならずと萬軍のエホバ言たまふ三即ち平安の種子あるべし葡萄の樹は果を結び地は産物を出し天は露を與へん我この民の遺餘者にこれを盡く獲さすべし三四ユダの家およびイスラエルの家よ汝らが國々の中に呪詛となりしごとく此度は我なんぢらを救ふて祝言とならしめん懼るる勿れ汝らの腕を強くせよ四萬軍のエホバかく言たまふ往昔汝らの先祖我を怒らせし時に我これに災禍を降さんと思ひて之を悔ざりき萬軍のエホバこれを言ふ五是のごとく我また今日エルサレムとユダの家に福祉を降さんと思ふ汝ら懼るる

勿れ一六汝らの爲べき事は是なり汝ら各々たがひに眞實を言べし又汝等の門にて審判する時は眞實を執て平和の審判を爲べし七汝等すべて人の災害を心に圖る勿れ僞の誓を好む勿れ是等はみな我が惡む者なりとエホバ言たまふ八萬軍のエホバの言われに臨めり云く九萬軍のエホバかく言たまふ四月の斷食五月の斷食七月の斷食十月の斷食かへつてユダの家の宴樂となり欣喜となり佳節となるべし惟なんぢら眞實と平和を愛すべし二〇萬軍のエホバかく言たまふ國々の民および衆多の邑の居民來り就ん三即ちこの邑の居民往てかの邑の者に向ひ我儕すみやかに往てエホバを和め萬軍のエホバを求めんと言んにも往べしと答へん四衆多の民強き國民エルサレムに來りて萬軍のエホバを求めエホバを和めん五萬軍のエホバかく言たまふ其日には諸の國語の民十人にてユダヤ人一箇の裾を拉へん即ち之を拉へて言ん我ら汝らと與に往べし其は我ら神の汝らと偕にいますを聞たればなり

第九章一エホバの言詞の重負ハデラクの地に臨むダマスコはその止る所なりエホバ世の人を眷みイスラエルの一切の支派を眷みたまへばなり二之に界するハマテも然りツロ、シドンも亦是なはだ伶俐ければ同じく然るべし三ツロは自己のために城郭を構へ銀を塵のごとくに積み金を街衢の土のごとくに積み四視よ主これを攻取り海にて之が力を打ほろぼしたまふべし是は火にて焚うせん五アシケロンこれを見て懼れガザもこれを見て

太く懐ふエクロンもその望む所の者辱しめらるるに因て亦然
 りガザには王絶えアシケロンには住者なきに至らん六アシドド
 にはまた雑種の民すまん我ベリシテ人が誇る所の者を絶へし七
 我これが口より血を取除き之が齒の間より憎むべき物を取除か
 ん是も遣りて我儕の神に歸しユダの牧伯のごとくに成べしまた
 エクロンはエブス人のごとくになるべし八我わが家のために陣
 を張て敵軍に當り之をして往來すること無らしめん虐遇者か
 さねて逼ること無るべし我いま我目をもて親ら見ればなり九シ
 オンの女よ大に喜べアルサレムの女よ呼はれ視よ汝の王汝に
 來る彼は正義して拯救を賜り柔和にして驢馬に乗る即ち牝驢馬
 の子なる駒に乗るなり一〇我エフライムより車を絶ちエルサレ
 ムより馬を絶ん戰爭も絶るべし彼國々の民に平和を諭さん其
 政治は海より海に及び河より地の極におよぶべし一 汝につい
 てはまた汝の契約の血のために我がの水なき坑より汝の被俘人
 を放ち出さん二 望を懐く被俘人よ汝等城に歸れ我今日もなほ
 告て言ふ我かならず倍して汝等に贅ふべし三 我ユダを張て弓
 となしエフライムを矢となして之につがへんシオンよ我汝の人
 々を振り起してギリシヤの人々を攻め汝をして大丈夫の劍の
 ごとくならしむべし四 エホバこれが上に顯れてその箭を電光
 のごとくに射いだしたまはん主エホバ喇叭を吹ならし南の暴風
 に乗て出來まさん五 萬軍のエホバ彼らを護りたまはん彼等は
 食ふことを爲し投石器の石を踏つけん彼等は飲ふことを爲し酒に

醉のごとくに聲を擧ん其これに盈さるることは血を盛る鉢のご
 とく祭壇の隅のごとくなるべし一六 彼らの神エホバ當日に彼ら
 を救ひその民を羊のごとくに救ひたまはん彼等は冠冕の玉のご
 とくになりて其地に輝くべし一七 その福祉は如何計ぞや其美麗
 は如何計ぞや穀物は童男を長ぜしめ新酒は童女を長ぜしむ
 第一〇章 一 汝ら春の雨の時に雨をエホバに乞へエホバは電光を
 造り大雨を人々に賜ひ田野において草蔬を各々に賜ふべし二 夫
 テラヒムは空虚き事を言ひト筮師はその見る所眞實ならずし
 て虚偽の夢を語る其慰むる所は徒然なり是をもて民は羊のご
 とくに迷ひ牧者なきに因て慍む三 我牧者にむかひて怒を發す我
 牡山羊を罰せん萬軍のエホバその群なるユダの家を顧み之をし
 てその美しき軍馬のごとくならしめたまふ四 隅石彼より出で釘
 かれより出で軍弓かれより出で幸たる者みな齧く彼より出ん五
 彼等戰ふ時は勇士のごとくにして街衢の泥の中に敵を蹂躪ら
 んエホバかれらととも在せば彼ら戰はん馬に騎れる者等すな
 はち媿を抱くべし六 我ユダの家を強くしヨセフの家を救はん我
 かれらを恤むが故に彼らをして歸り住しめん彼らは我に棄られ
 し事なきが如くなるべし我は彼らの神エホバなり我かれらに聽
 べし七 エフライム人は勇士に等しくして酒を飲たることく心に
 歡ばん其子等は見て喜びエホバに因て心に樂しまん八 我かれら
 に向ひて嘯きて之を集めん其は我これを贖ひたればなり彼等は
 昔殖増たる如くに殖増ん九 我かれらを國々の民の中に捲ん彼等

は遠き國において我をおぼへん彼らは其子等とともに生ながらへて歸り来るべし。○我かれらをエジプトの國より携へかへりアツスリヤより彼等を集めギレアデの地およびレバノンに彼らを携へゆかんその居處も無きほどなるべし。○彼艱難の海を通り海の浪を撃破りたまふナイルの淵は盡く涸るアツスリヤの傲慢は卑くせられエジプトの杖は移り去ん。○我彼らをしてエホバに由て強くならしめん彼等はエホバの名をもて歩まんエホバこれを言たまふ。

第一章レバノンよ汝の門を啓き火をして汝の香柏を焚しめよ。○松よ叫べ香柏は倒れ威嚴樹はそこなはれたりバシヤンの椽よ叫べ高らかなる林は倒れたり。○牧者の叫ぶ聲あり其榮そこなはれたればなり。○猛き獅子の吼る聲ありヨルダンの叢そこなはれたればなり。○我神エホバかく言たまふ。○宰らるべき羔を牧へ五之を買ふ者は之を宰るとも罪なし之を賣る者は言ふ我富を得ればエホバを祝すべし。○其牧者もこれを惜まざるなり。○エホバ言たまふ。我かかねて地の居民を惜まじ。視よ我人を各々その隣人の手に付しその王の手に付さん。彼ら地を荒すべし。我これを彼らの手より救ひ出さじ。○我すなはち其宰らるべき羊を牧り。是は最も憫然なる羊なり。我みづから二本の杖を取り。一を恩と名け。一を結と名けてその羊を牧り。○我一月に牧者三人を絶り。我心に彼らを厭ひしが彼等も心に我を惡めり。○我いへり。我は汝らを飼はじ。死る者は死に絶るる者は絶れ。遺る者は互にその肉を食ひあふべ

し。○我恩といふ杖を取て之を折れり。是諸の民に立し我契約を廢せん。とてなりき。○是は其日に廢せられたり。是に於てかの我に聽したがひし憫然なる羊は之をエホバの言なりしと知れり。○我彼らに向ひて汝等もし善と視なば我價を我に授けよ。若しからずば止めよと言ければ彼等すなはち銀三十を權りて我價とせり。○エホバ我に言たまひけるは。彼等に我が估價せられしその善價を陶人に投あたへよ。と我すなはち銀三十を取てエホバの室に投いれて陶人に歸せしむ。○我また結といふ杖を折れり。是ユダとイスラエルの間の和好を絶んとてなりき。○エホバ我に言たまはく。汝また愚なる牧者の器を取れ。○六視よ我地にひとり一人の牧者を興さん。彼は亡ぶる者を顧みず。迷へる者を尋ねず。傷つける者を醫さず。健剛なる者を飼はず。肥たる者の肉を食ひ且その蹄を裂ん。○七其羊の群を棄る。惡き牧者は禍なるかな。劍その腕に臨みその右の目に臨まん。其腕は全く枯えその右の目は全く盲れん。

第二章イスラエルにかかはるエホバの言詞の重負。エホバ即ち天を舒べ地の基を置衆人のうちの靈魂を造る者言たまふ。○視よ我エルサレムをしてその周圍の國民を踰躐はする杯とならしむべし。エルサレムの攻圍まる時は。是はユダにも及ばん。○其日には我エルサレムをして諸の國民に對ひて重石とならしむべし。之を持擧る者は大傷を受ん。地上の諸國みな集りて之に攻寄べし。○エホバ言たまふ。當日には我一切の馬を撃て駭かせその騎手を

撃て狂はせん而して我ユダの家の上に我目を開き諸の國民の馬を撃て言になすべし五 ユダの牧伯等その心の中に謂んエルサレムの居民はその神萬軍のエホバに由て我力となるべしと六 當日には我ユダの牧伯等をして薪の下にある火盤のごとく麥束の下にある炬火のごとくならしむべし彼等は右左にむかひその周圍の國民を盡く焚んエルサレム人はなほエルサレムにてその本の處に居ことを得べしエホバまづユダの幕屋を救ひたまはん是ダビデの家の榮およびエルサレムの居民の榮のユダに勝ること無らなためたり八 當日エホバ、エルサレムの居民を護りたまはん彼らの中の弱き者もその日にはダビデのごとくなるべしまたダビデの家は神のごとく彼らに先だつエホバの使のごとくなるべし九 その日には我エルサレムに攻きたる國民をことごとく滅すことを務むべし一〇 我ダビデの家およびエルサレムの居民に恩恵と祈禱の靈をそそがん彼等はその刺たりし我を仰ぎ觀獨子のため哭くがごとく之がために哭き長子のために悲しむがごとく之がために痛く悲しまん一 其の日はエルサレムに大なる哀哭あらん是はメギドンの谷なるハダデリンモンに在し哀哭のごとくなるべし二 國中の族おのの別れ居て哀哭すべし即ちダビデの族別れ居て哀哭すその妻等別れ居て哀哭すナタンの家の族別れ居て哀哭すその妻等別れ居て哀哭かん三 レビの家の族別れ居て哀哭すその妻等別れ居て哀哭きシメイの族別れ居て哀哭すその妻等わかれ居て哀哭かん四 其の他の族も

すべ 凡て然りすなはち族おのおの別れ居て哀哭すその妻等別れ居て哀哭くべし

第一三章一 その日罪と汚穢を清むる一の泉ダビデの家とエルサレムの居民のために開くべし二 萬軍のエホバ言たまふ其日には我地より偶像の名を絶のぞき重て人に記憶らるること無らしむべし我また預言者および汚穢の靈を地より去しむべし三人もしなほ預言することあらば其生の父母これに言ん汝は生べからず汝はエホバの名をもて虚偽を語るなりと而してその生の父母これが預言しをを刺ん四 その日には預言者等預言するに方りてその異象を羞ん重て人を欺かんために毛衣を纏はじ五 彼言ん我は預言者にあらず地を耕へす者なり即ち我は若き時より人に買れたりと六 若これに向ひて然らば汝の兩手の間の傷は何ぞやと言あらば是は我が愛する者の家にて受たる傷なりと答へん七 萬軍のエホバ言たまふ劍よ起て我牧者わが伴侶なる人を攻よ牧者を撃て然らばその羊散らん我また我手を小き者等の上に伸べし八 エホバ言たまふ全地の人二分は絶れて死に三分の一はその中に遺らん九 我その三分の一を携へて火にいれ銀を熬分るごとくに之を熬分け金を試むるごとくに之を試むべし彼らわが名を呼ん我これにこたへん我これは我民なりと言ん彼等またエホバは我神なりと言ん

第一四章一 視よエホバの日來る汝の貨財奪はれて汝の中にて分たるべし二 我萬國の民を集めてエルサレムを攻撃しめん邑は取

られ家は掠められ婦女は犯され邑の人は半は虜へられてゆかん
 然どその餘の民は邑より絶れ三その時エホバ出きたりて其の
 の國人を攻撃たまはん在昔その軍陣の日に戦ひたまひごとく
 なるべし四其日にはエルサレムの前に當りて東にあるところの
 橄欖山の上に彼の足立たん而して橄欖山その真中より西東に
 裂て甚だ大なる谷を成しその山の半は北に半は南に移るべし五
 汝ら是我山の谷に逃いらん其山の谷はアザルにまで及ぶべし
 汝らはユダの王ウジヤの世に地震を避て逃しごとくに逃ん我神
 エホバ來りたまはん諸の聖者なんぢともなるべし六その日に
 は光明なかるべく輝く者消つすべし七茲に只一日あるべしエ
 ホバこれを知たまふ是は晝にもあらず夜にもあらず夕晝の頃に
 明くなるべし八その日に活る水エルサレムより出でその半は東
 の海にその半は西の海に流れん夏も冬も然あるべし九エホバ
 全地の王となりたまはん其日には只エホバのみ只その御名のみ
 にならん一〇全地はアラバのごとくなりてゲバよりエルサレム
 の南のリンモンまでの間のごとくなるべし而してエルサレムは
 高くなりてその故の處に立ちベニヤミンの門より第一の門の處
 に及び隅の門にいたりハナニエルの戌樓より王の酒榨倉までに
 渉るべし二その中には人住ん重て呪詛あらしエルサレムは
 安然に立べしニエルサレムを攻撃し諸の民にエホバ災禍を降
 してこれを撃なやましたまふこと是のごとくなるべし即ち彼ら
 その足にて立をる中に肉腐れ目その孔の中にて腐れ舌その口の

中にて腐れん三その日にはエホバかれらをして大に狼狽しめ
 たまはん彼らは各々人の手を執へん此手と彼手撃あふべし四
 ユダもまたエルサレムに於て戦ふべしその四周の一切の國人の
 財寶金銀衣服など甚だ多く聚められん五また馬騾駱駝驢馬お
 よびその諸營の一切の家畜の蒙る災禍もこの災禍のごとくなる
 べし六エルサレムに攻きたりし諸の國人の遺れる者はみな
 歳々に上りきてその王なる萬軍のエホバを拜み結茅の節を守
 るにいたるべし七地上の諸族の中その王なる萬軍のエホバを
 拜みにエルサレムに上らざる者の上には凡て雨ふらざるべし八
 例ばエジプトの族もし上り來らざる時はその上に雨ふらじエ
 ホバその結茅の節を守りに上らざる一切の國人を撃なやます
 災禍を之に降したまふべし九エジプトの罪凡て結茅の節を守
 りに上り來らざる國人の罪是のごとくなるべし一〇その日には
 馬の鈴にまでエホバに聖としるさん又エホバの家は銅は壇の前
 の鉢と等しがるべしニエルサレムおよびユダの銅は都て萬軍
 のエホバの聖物となるべし凡そ犠牲を獻ぐる者は來りてこれ
 を取り其中にて祭肉を煮ん其日には萬軍のエホバの室に最早力
 ナン人あらざるべし